

グレアム・グリーンの『第三の男』について

On Graham Greene's *The Third Man*

岩崎 正也
Masaya Iwasaki

1

「地下室」はフィリップ少年が生を発見するところから始まり、死へ下降するところで終る。一方、『第三の男』はロロ・マーティンズが死を通過し再生に至るところで終る。生から死、死から再生への二種の領域を分ける鍵は、国境を象徴するラジャ張りのドアの変型である墓地が持つ両義性にあると見ることができる。

玄関のドアが彼ら二人を締め出し、召使頭のベインズが暗い、重苦しい玄関に戻って来ると、フィリップは生を感じ始めた。（「地下室」）

ラジャ張りのドアを隔てて幼年と大人の世界が、また原始と文明の二種の世界が向き合い、少年はドアを通るたびに生と死を往還する。

ハリーに最後の別れを告げたのは一週間前のことだった。そのとき彼の柩が凍りついた2月の地面の中へ降ろされた。（『第三の男』）

ハリー・ライムの2度目の葬儀が行れたのは春のように暖かな日だった。彼を再び地の下に埋めることができ嬉しかった。（『第三の男』）

物語はハリーの死の始まりで始まり、ハリーの死の終りで終る。マーティンズによる「第三の男」探しは、ハリーの第1の葬儀から、第2の葬儀までの7日間で完了する。ブライアン・トマスは「第三の男」探しの二義性を次のように記している。

(1) 小説の冒頭近くで、彼（＝マーティンズ）は冬の最中、ウィーンの墓地に入り、やがて迷い子になったことに気づく。物語の結末で彼は春

のような雪解けの日と同じ墓地を歩いて出る。
(2) 彼はまるで墓地というよりはどこか北国のお伽噺の舞台に入りこんだようだ。

ここでユングの「魂こそが意識の母胎であり、主体であり、意識の成立を可能にするものである。魂の領域をはるかに超えるので、意識を大海の中の島に譬えることができる」という言葉を持ち出せば、マーティンズは(1)の記述のように、自己の意識を通して、「死」の位相に下降し、同時に、(2)の記述のように、無意識を通して神話の世界へ遡行すると言い換えることができる。

このように墓地が意識の「死」の位相と無意識の神話との両方の世界を結ぶための国境である意味から、「墓地」に付んで7日にわたるマーティンズの「第三の男」探しを視れば、グウェン・ボードマンの「失われた幼年時代という反復的なテーマの神話的変奏」という言葉が『第三の男』にも当てはまる。

2

『第三の男』は、物語の語り手が言うように、ブリティッシュ・カウンシルの講演会というフェルスを除けば、「冷酷な、もの悲しい、救いのない」物語である。

2月7日、ウィーンに降りてハリーの住む4階のアパートに辿り着いたマーティンズはドアにかかる黒いリボンを見て、ハリーの死を予感する、というふうに物語は冒頭から「死」の予兆で始まる。そして墓地へ親友の埋葬に訪れた35歳のマーティンズは文字通り涙を流して、学校時代（パブリック・スクールを想わせる）の英雄の死を悼む。

マーティンズによる「第三の男」探しの過程をまとめてみると次のようになる。

- (1) マーティンズがハリーのアパートを訪ねると、管理人のコッホは、自動車事故による即死だと言う。この言葉は、マーティンズの無意識の中に留まる。
- (2) 葬儀の後、小さなバーでキャロウェイと2人で飲んだとき、「彼があんな死にかたをしたと思うと残念だ」と言うマーティンズに向かい、キャロウェイは、「それが今まで一番いいことだったよ」と言う。ハリーと自己の共同体であるイノセンスの世界を否定されたことに激怒して、マーティンズはハリーが悪質な闇商人であるという警察発表に挑戦して「ハリー」探しに旅立つ。
- (3) 埋葬の終わった日の夜、ホテルへ電話を寄こしたクルツの話聞いたとき、突然、ハリーの事故死に疑惑を感じる。クルツは、マーティンズがお金を持っていないことをハリーが心配していたと言ってハリーが即死でないことを暗示したからである。この点もマーティンズの無意識の中に留まる。
- (4) 2月8日、マーティンズはハリーの友人と称するクルツとヴィンクラーに別個に会う。2人とも、運転手と後から来たヴィンクラーを除けば事故現場にいたのはクルツとクーラーの2人であり、ハリーの死が即死でないことを示唆する。
- (5) 再びコッホ宅に行き状況を尋ねると、即死であり、現場には第三の男がいたという3人説を示す。そしてマーティンズが殺人事件の存在を意識の上に認めることにより、「第三の男」は「ハリー」+「第三の目撃者」と、イノセンスの二極に分解する。
- (6) 2月9日、マーティンズはクーラーを訪ね、目撃者について2人説を聞かされる。
- (7) 2月10日未明、アンナ宅から帰る途中、ハリーに出会うことによって、警察発表によるハリーの自動車事故死説を覆す。
- (8) 大観覧車のゴンドラに乗りこんで、マーティンズはハリーにたいし、子ども殺しの罪を認めさせようとするが、ハリーは、それを拒絶する。マーティンズはハリーへの裏切りを決意し、警察の囹捜査に協力してハリーを呼び出す。

- (9) 捜査網に追われて、ハリーは地下水道に隠れる。地下の「死」の世界でハリーはマーティンズに撃たれて死ぬ。
- (10) 2月14日、雪解けの日。マーティンズは墓地で行れたハリーの埋葬に立ち合う。

マーティンズはハリーが「この町でうしろ暗い生活をしている最低の闇商人」であるというキャロウェイの報告に挑戦し、「ハリー」探しを始める。けれども、自己の「生」が学校時代に知り合ってから20年間崇拜し続けてきた英雄としてのハリーの「生」の体系に所属しているため、両者に共通のイノセンスの世界から今も抜け出すことができない。

初日の夜、ホテルで眠ったときに見た夢——夜、雪の中をウィーンの深い森へハリーに会いに出かけたマーティンズが、ハリーのテーマ曲を口笛で吹く別の男に会うという夢は、ハリーのイノセンスの崩壊を予告する。マーティンズは、かかってきたクルツからの電話により、キャロウェイの言う説明と異なり、ハリーの死が即死ではないということを知り、夢が突然ハリーの死因とその状況にたいする疑惑として意識の上に刻まれる。

ウィーンに来て2日目の午後、ヨーゼフシュタット劇場にアンナを訪ねたマーティンズは対談中、無意識の中に、「子どもの切り刻んだ地図」の断片をつなぎ合わせてハリーのイノセンスの風景画をジグソー・パズルのように完成させようとする。荒地に横たわる死者の上に群がる鳥。その少年の姿勢はハリーであることを示している。

3

マーティンズはハリーの関係者を次々に訪ねて、主にハリーが即死かどうか、目撃者が何人いたかを尋ねる。

2月7日、クルツ（電話）は即死でないことを示唆。

2月8日、クルツは、即死でないこと、2人説を示す。

アンナは、伝聞として、即死でないこと、2人説を示す。

ヴィンクラーは即死でないこと、2

人説を示す。

コッホは、即死、3人説を示す。

2月9日、クーラーは、即死でないこと、2人説を示す。

アンナ宅から二人で再びコッホ宅へ向かったマーティンズにたいし、マーティンズをコッホ殺害の容疑者とするハンゼル少年の疑惑が向けられたため、2人はそこから走り去る。コッホの葬儀に偶然出会ったために、マーティンズは「追う」存在から突然「追われる」存在へ転換する。

あの子の疑惑と機敏さが町中を雲のように拡がっていくようだった——2人はその影から逃げ出すほど速く歩くことはできなかった。(『第三の男』)

「追われる」という知覚は、語り手によってマーティンズの無意識の中に潜んだことを示されるが、別れ際にアンナから「気をつけてよ。コッホはほとんど何も知らなかったのに、彼らに殺されたんですから」と言われたときにマーティンズは始めて「追われる」を意識する。

マーティンズを追うハンゼル少年の疑惑と機敏さの影は、アンナの警告によって顔のない第三の男として意識化される。

9時過ぎには人通りはほとんどなかった。彼はまるで彼ら在必死に守ってきた死刑執行人のようなあの第三の男から追われているかのように、人の足音が後から通りを近づいて来るたびに振り返った。グランド・ホテルの外に立つロシア人の歩哨は寒さに硬直しているようだったが、人間の様子をしていて、モンゴル人の眼をした正直な農民の顔をしていて、第三の男には顔がなく、頭のとっぺんが窓から見えに過ぎない。

したがってザッヘル・ホテルに着くまでの道中ずっとこの意識に捉われていたので、マーティンズは、キャロウエイの車と錯覚してブリティッシュ・カウンスル差しまわしの車に乗りこむ。

語り手のキャロウエイが言うように、この物語にただ1回のファルスがこの後起こる。講演会の最中も、「追われる」がマーティンズの無意識と

意識の中に在り続けたために、マーティンズは当日の討論について何も覚えていない。

そしてサイン会が終りに近づいた頃、マーティンズを追う憲兵が捜索のために入口にやって来るが、マーティンズは講演者のベンジャミン・デクスターとして演技を続け、その追求を逃れて2階の踊り場にある部屋に隠れる。暗黒の部屋の恐怖感がマーティンズを「追われる」意識で充たす。キャロウエイの忠実な部下のペインに救われたマーティンズは、この喜劇的な文化講演会の前での予定であるキャロウエイとの会談に臨むのだ。マーティンズが、キャロウエイからハリーが盗んできたベニシリンに水や砂を混ぜて密売する闇組織の首謀者であることを聞かされて、「学校の廊下で20年前に始まった気ままな友情、英雄崇拜、信頼の世界が終りを告げた」ことを意識したときに、「彼はいつも無謀だった」と始めてハリーを誹謗し、さらに「何らかの慰めを求めた」のは、水増しベニシリンによる子どもの死を惹き起こしたハリーのイノセンスが不正と悪であることを発見したからである。

このようにして、地上でのマーティンズとハリーとの間に繰り上げられる「追う」と「追われる」の両者の対決は、マーティンズが夜半、街角に見つけた実在のハリー・ライムが地上と地下との二種の世界の国境である広告塔を潜ってマーティンズの意識から消滅した後、アイダの human 'right and wrong' の水平的関係からピンキーの divine 'good and evil' の垂直的關係へと転回する。垂直的關係の象徴である巨大な観覧車のゴンドラの中でハリーと対決するマーティンズはついに「第三の男」がハリーであることを知覚すると同時に両者の共同のイノセンスが悪であることを認める。

マーティンズによるイノセンスの悪についての認識が、天空を昇降するゴンドラの中で、にわか罪の意識に転化したのは、彼が悪による子どもの死に恐怖と責任を感じたときである。「あの子どもたちの病院に行ってみたことがあるかい。君の犠牲者を見たことがあるかい」と尋ねられたハリーが「犠牲者だって。感傷的になるなよ」と自己の悪を否定したことに触発されたからである。悪の認識から罪の意識への転換——両者を結ぶ鍵を子どもの「死」とするプロットが『おと

なしいアメリカ人』のファウラーとパイルの関係にも再現されているのは、アトキンズが言うように「子どもの墮落はグリーンにとっていつも大きな悪であった」からである。「君は昔カトリックだったね」と言われたハリーは、「ああ、今でも信じているよ。神や慈悲やすべてのものを。おれがしていることはだれの魂をも傷つけてはいない。死者は死んでいっそう幸福なんだよ」と答えることによって、「われ唯一のサタンを信ず」と言うピンキーの持つ逆説的な神への信仰を提示する。これを聞いてマーティンズの「ハリー」探しの行動は、罪の意識からさらに裏切りへと発展する。「俺を信用するな、ハリー」と叫ぶことにより、マーティンズは警察に協力して英雄を捕えることを決意する。

国境としての広告塔を降りた地下水道の世界は、「追う」マーティンズがついに探しあてた悪のイノセンスの位相であると同時に、人間ハリーの住処でもある。包囲網の中でマーティンズの裏切りによりハリーのイノセンスは崩壊し、マーティンズの射撃によりハリーは死ぬ。このようにして、ハリーとイノセンスとに分化していたマーティンズの「ハリー」は地下水道の中で再び「第三の男」として統一、融合され、雪解けの墓地で行れた2回目のハリー埋葬のときにマーティンズの「第三の男」の死が完結する。ハリーのイノセンスの呪縛から解放されたロロ・マーティンズは恋人としてアンナを獲得して長い並木道を抜けて墓地から再生へと復活する。

4

マーティンズが追う「第三の男」の心象風景はT・S・エリオットの『荒地』の第5章「雷神の言葉」の風景に対応する。

君達の傍にもうひとりの人がいつも歩いている
がそれは誰だ？
僕が数えると君達と僕だけだ
あの白い路の先方を見ると
君達と一緒に歩いている人がいつももう一人いるのだ
鳶色のマントに身をつつみ

頭巾をかぶって音もなく歩いている
男か女かわからないが——
君達と一緒にいるあの人は誰だ？(西脇順三郎訳)

原詩の1行目はWho is the third who walks always beside you ?

エリオット註によればこの節の7行(原詩の)は南極探検隊員の極度の疲労による幻想からヒントを得たという。西脇は、新約聖書ルカ伝第24章のエマオへ行く旅人にたいするキリストの顕現の記事にヒントを得たと述べている。

祝よ、この日2人の弟子、エルサレムより三里ばかり隔りたるエマオという村に往きつつ、凡て有りし事どもを互に語りあふ。語りかつ論じあふ程に、イエス自ら近づきて共に往き給ふ。されど彼らの目遮へられて、イエスたるを認むること能はず。(ルカ伝24章13-16)

またマーティンズがハリーを追って国境である広告塔を潜って降り立つ地下水道の世界は『アラン・クォーターメイン』による洞穴の地下水流に描かれた「死」の風景に対応する。

ククアナ国への冒険から戻って3年後、探検家アラン・クォーターメインは友人のヘンリー・カーティス、ジョン・グッドとともに再びアフリカへ探検の旅に出る。現住民の部下を連れた3人は、2隻のカヌーに分乗して湖を渡り、洞穴の急流へと吸いこまれる。暗黒と寒冷から焦熱へと変わる地底の河にも、河の中央部が最も流れが速く、また新鮮な空気が絶えず流れているというように、地上と同じ基準が働いている。空中50フィートに昇る巨大な火柱、巨大な蟹が焼けた白鳥を喰う無気味な風景、そして長いトンネルを脱出してミロシスの町に着く。ウィーンの地下水道も潮の干満があり、テムズ河の半分くらい河幅の水量が滝として落下する地点では爽快な浄化された空気の匂いが漂っている点で、地上の世界に似た原理によって支配されている。

5

『第三の男』が映画「第三の男」を最終原稿と

する下書きとして書かれたという制作事情は、コレクティッド・エディションの『第三の男・負けた者がみな貰う』の序文と自伝『逃走の方法』の中で明らかにされている。

「読んでもらうためでなくただ見てもらいたいために書いた」『第三の男』との格闘はアレキサンダー・コルダからキャロル・リードのために書いて欲しいと依頼されたときに始まる。そのとき作者のアイデアは次の文章だけであった。

ハリーに最後の別れを告げたのは1週間前のことだった。そのとき、彼の柩が凍りついた2月の地面の中へ降ろされた。だから、彼がストランドの人混みの中を知らん顔をして通り過ぎるのを見たとき、とても信じられなかった。

(『第三の男』)

1948年、米英仏ソの4大国の占領下に置かれているウィーンへ取材旅行をしたとき、グリーンは、作品の中で最も重要な舞台となる悪の世界として表される下水道と地下警察の存在を英国諜報部の将校から聞かされた。偶然に、グリーンは将校と一緒に国境というランチャ張りのドアの変型である広告塔(advertisement kiosk)を通過して下水道の暗渠の中を歩くうちに「物語全体が形をなしてきた」という。

小説と映画との最も重要な変更は物語の結末にある。小説の結末では、「死」の下水道から復活したマーティンズが悪にまみれた「イノセンス」を墓地に葬ったあと、車で送ろうというキャロウエイの申し出を断って、並木道を先行するアンナを追う。そして2人が腕を組んで立ち去るというハッピー・エンディングはマーティンズの救いをも表している。一方映画では、アンナが、マーティンズのアートを拒絶し、自己をハリーとともに墓地に葬った後、並木道を1人で観客の方へ歩き去るのだが、その場面について、グリーンは、「女が墓場から長い距離を歩く間座席にじっと座っている観客はいないのではないかと心配した。降ろしてくれ、と言われてジープを止めてからキャロウエイが走り去った後、並木道を観客の方へ向って歩き出すアンナが映る瞬間から、マーティンズに一瞥もくれずに画面の右手へ消えるまでに、

約1分14秒、その場面の途中で、キャロウエイが後ろを振り返るショットを除いても、アンナが歩き去る最後のショットは約48秒かかっている。しかしリードの演出のおかげで「結果は彼が正しいということが見事に証明された」とグリーンは感嘆している。

映画の中でハリー・ライム・テーマ曲をツイターで奏でるアントン・カラスの存在はリードにとっても予想外の掘出し物であったらしい。1948年10月18日、リードはウィーンのプロデューサーのカール・ハルテルに招かれて妻を伴ってパーティーに出席し、始めてカラスのツイター演奏に接する。それまで作品中の映画音楽のことで頭を痛めていたリードにとってこれは天啓による出会いだった。

《私は瞬間的に思った。これから撮る「第三の男」の映画音楽にこの楽器と男を使おう。この音楽は1948年のウィーンではウィーン・フィルの演奏やウィンナワルツの優雅な調べよりウィーンという町を特徴づけている。そうだ！全編を通してこの楽器を使ってウィーンのマードをかもし出そう》(軍司貞則『滅びのチャター師』)
(1989. 10. 12 受理)

註

- (1) 『第三の男』の引用は *The Third Man and Loser Takes All* (London: The Bodley Head, 1976)から。
- (2) ブライアン・トマスの引用は *An Underground Fate The Idiom of Romance in the Later Novels of Graham Greene* (London: The University of Georgia Press, 1988)から。